

コミュニケーションとレトリック

五 島 幸 一

はじめに

「コミュニケーション」という言葉が日本であらゆる分野において登場してきて久しいが、この言葉ほど乱暴に、また無秩序に使用されている語は数少ないであろう。現在では、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などあらゆるものを通してこの言葉が幅を利かせているように思える。そこでは、コミュニケーションがあらゆる問題を解決し、いかなる目的をも達成できるかのごとく考えられている節がある。また、コミュニケーションは社会的問題、政治的問題、倫理的問題に対しての万能薬として捉えられてしまっている誤解がある。現実には、コミュニケーションの問題だと指摘される中には、多くの問題がコミュニケーションとは関連が無いように思われる。また、コミュニケーション上の問題であっても、その解決策を求めるのをコミュニケーションの量の問題であるとし、質的な問題には一向に触れていない勘違いがよく見られる。人々の話題によく上がるものに、「もっとコミュニケーションがあったら」という言葉があるが、これは量的観点から述べる More Communication を問題意識しているが、現実には質の問題であり、いわゆる Better Communication に関わる事であることが往々にして存在する。本稿では、そのような誤解を解くために、コミュニケーションおよびレトリックの研究の動向を概観するものである。

コミュニケーション研究の動向—Social Science からのアプローチ

一口にコミュニケーション研究といっても、その包括する範囲が非常に広く、定義づけも困難である。これは、コミュニケーションという学問がかなり学際的であるという特徴から派生している。従って本論で述べるコミュニケーション研究については、人間が行なうコミュニケーション活動、つまり Human Communication としてのコミュニケーション研究に限定して話を進めていく。

まず最初に20世紀のコミュニケーション研究の流れの中で、科学的な側面からの影響または研究活動について見てみる。20世紀初頭において心理学または社会心理学といった領域では、行動主義や態度変容の研究に焦点が当てられるようになってきて、人間行動の研究に一層拍車がかけられるようになった。行動主義はおそらく心理学の中では最も実験的な志向が強い学派であり、自然科学のモデルを人間の研究に応用したものであった。その代表的なものがパブロフによって行なわれた刺激-反応の実験であり、それはニュートン力学の延長でもあった。

学習と行動の研究は、1920年代から50年代にかけてかなり積極的に進められ、いわゆる「学習理論」といわれるものが行動科学者たちの中心的な研究課題となってきた。その中で、B.F.Skinner を中心とした行動主義心理学者たちが人間の学習と行動に関して研究を推し進め、研究者たちがコミュニケーションの研究を手掛け始めた頃に、かなり大きな勢力を保持していた。そのような行動を調べる実験では、ある刺激がどのように反応に影響を及ぼすのかということ考察するために、状況を制限した下で刺激を操作するのが典型的であった。このような一連の実験の中では、「習慣 (Habit)」に関連した研究も行なわれ、刺激-反応というつながりをもとに、報酬と習慣についても言及している。行動主義心理学者たちが目指したものは、ニュートンの万有引力の法則のように、人間の行動に対して普遍的に適用できる理論の構築であった。しかし1970年代ころになるとそのような望みが薄れて、そして学習理論も適用範囲が限られた仮説となっていった。

上記の研究の流れとは異なるものに、「態度変容」に関する研究があり、1920年代頃から多くの研究者たちが携わってきた。ここでもやはり実験的な手法を用いての研究であり、Oral Communication（口頭コミュニケーション）に関する実験的研究の成果が出されたのは1920年代であった。それから聴衆に関する研究についても進められていった。初期の頃の研究のトピックには様々なものがあり、例えば、個人的資質とコミュニケーション・スキルの関係、パブリック・スピーキングのクラスの効果性の問題、またはメッセージの内容分析など多くの視点からの研究がある。その中でも重要視されたのが意見と態度に関する研究であり、聴衆があるスピーチまたはデバートを聞いてどのように意見や態度を変えるのかを調べていくものであった。そのような初期の研究から発展して、様々な種類のコミュニケーションの内容が態度や意見にどのように影響を及ぼしているのかという研究が出てきた。そこでは、例えば、送り出すメッセージの内容について論理的（Logical）な議論か感情的（emotional）な議論かを区別して、聴衆がどのように反応するのかを考察した研究が挙げられる。また、ユーモラスのあるスピーチと無いスピーチが聴衆の態度変容にどのように関わりあっているのかを調べた研究も登場してきた。そして1940年代後半からメッセージの送り手の信いつ性の問題を取り上げた研究も進められた。

このように、メッセージの内容、送り手、聴衆、メッセージを送る方法などをそれぞれ変数として捉えて、ある変数を条件づけして、他の変数の変化をみていくという実験的な研究が多くの社会心理学者やコミュニケーション学者たちによってなされた。このような研究はそれぞれの変数間の関係を調べていくことによって、それらを数値的に表し、予測やコントロールを可能にしていこうとするものである。

コミュニケーション研究の動向—Humanism からのアプローチ [レトリック]

これまで見てきたのが社会科学の側面からコミュニケーションを研究す

る動向であったが、コミュニケーションを人文科学的側面から考察しようとするものがレトリックである。「レトリック」という言葉はあまり日本人の間には聞き慣れていない言葉であり、日本では修辞学と訳され、単なる言葉の表面を取り扱う美辞麗句を対象とした研究として見なされていることが多い。また、レトリックを中身の問題ではなく表面だけの浅薄なものとして捉え、それを軽蔑視する傾向もあることは否定できない。しかし、欧米ではレトリックは人間が行なう言語的または非言語的なシンボル活動として位置づけられている。そしてその起源は古く、古代ギリシャ時代にさかのぼる。

起源前465年頃当時ギリシャの植民地であったイタリアの Sicily 島で、西洋で初めてのレトリックについて書かれた本が発行された。これは、当時権勢を振るっていた独裁専制政治が倒され、代わって民主政治が敷かれたことに端を発するものであった。かつて土地の地主であった人々が、独裁専制政治が倒れたのをきっかけに自分の土地を取り戻そうとして、弁論という形で法廷で自分の言い分を主張しなければならなかった。そして、法廷での議論で相手に勝てば、争議中の資産が自分の所有のものになるという状況に目をつけたのが Corax であり、彼は法廷弁論の進め方を人民に教授した。これが基になり、レトリックが出現した。古代ギリシャでは、訴訟は日常茶飯事のことであり、特に重要な件に関しては何百人という陪審員が法廷にのぞんだ。

この時代のレトリック研究に貢献した人々として、Aristotle, Cicero, Quintilian といったレトリック理論家たちが挙げられ、彼らたちに共通しているのはレトリックを教授可能 (teachable) であり、実用的なものとなしなしていることであった。例えば、レトリックをスピーチの構想 (invention), 構成 (organization), 修辞 (style), 記憶 (memory), 所作 (delivery) という五つの規範に分けたり、スピーチの場を法廷、議会、儀式という三つに区分したり、議論の中での証明方法については論理論証、倫理論証、感情論証というように三種類に分類分けした。このように、レ

トリックを一般市民に教えるということを前提にして、大衆に真実を伝えるモラル的な役割を果たすもの、また科学的見地からの分類、分析と位置づけているのが古代レトリックの特徴でもある。そして何と言っても大きな特徴としては、スピーチを説得性の強いものとして作り上げるのを薦めている。

この古代ギリシャ・ローマ時代を経て、次にレトリック理論が大きく変遷を遂げることになったのは18世紀になってからであった。その前の14世紀から17世紀にヨーロッパで起こった文芸復興の時期には、レトリック理論についてはあまり目新しい改革はなかった。しかし、古代ギリシャ・ローマ時代の古典の見直しにともなって、レトリックの分野でも、CiceroやQuintilianなどが再び注目された。この時代のレトリックの特徴としては、大きく分けて三つの流れが挙げられる。一つ目は、認識論であり、人間の知識の本質や起源などを研究するものであり、心理学の見地にたって古代ギリシャ時代のアプローチを再検討した。そこでは、レトリックは人間の心理の過程と関連づけて理解され、人間の本質または人生論に立脚したレトリックの発達に貢献した。その時期に輩出したレトリック理論家のGeorge CampbellやRichard Whatelyがこの流れに沿って研究を進めた。彼らたちは、古代レトリックの欠点があったスピーチと人間精神との関係の空白部分を埋めようと努めた。従って、レトリックに対して聴衆中心 (audience-centered) のアプローチをとり、現代の聴衆分析 (audience analysis) の方向付けを行なった。

二つ目の流れは美文学的 (belles lettres) な研究であり、古代レトリックのオーラルー辺倒の側面に書き物をも対象に含めて、その範囲を拡大したことに寄与した。ここでは、それまで軽視されていた文章にもレトリックがあるとして、文学や批評といったものとレトリックを合併させた。そして、レトリック、詩、音楽、ドラマ、さらに建築までも含めてすべての芸術に同じ批評基準を適用させようとしたことであった。この研究を行っていた研究者の中で、Hugh Blairが代表的な存在であった。彼はレトリ

ックと文学と批評との関係を概観したり、文学作品の表現形式について語った。彼が最も貢献したことは、何か美しいものとの接触から喜びを取り出す力について、そして崇高と美について論じたことである。彼のレトリックに対する考えは人気を博し、現代のレトリック批評の下地を敷いたともいえる。

三つ目の流れは、エロキューション (elocution) に関する研究であり、18世紀半ばに気運が高まった。これは当時の牧師や弁護士や公衆の前に出る人々のスピーチの所作 (delivery) のまずさを反映して発達したものであった。このことは、古代レトリック時代から所作の規範が軽視されてきたことに派生したものであった。従って、スピーチをするスタイルだけに焦点を当てて、声の調子やジェスチャーの研究を推し進めた。そして、聴衆に対してのスピーチの効果を考えたために、心理学とも結びついた。

以上のような18世紀のレトリックは古代レトリックの欠落している部分の補充に力が注ぎ込まれ、スピーチのメッセージと聞き手の心理との関係を深追いしすぎたあまり、レトリックの核となる機能、つまり社会の統一を促進し、社会統制を遂行するという社会的機能が軽視されたことが大きな欠点であった。

20世紀にはいってレトリックが再び注目されだした。そして、特にアメリカにおいてレトリックの復権が叫ばれた。これは、世界の列強の一國、または世界のリーダー的存在であったアメリカが国内の社会問題や人種問題、ひいては戦争や外交などの国際問題に悩まされだしたという状況が引き金になっている。さまざまな問題が起こり、人間疎外や社会不適応という現象が起きだした。このような、社会状況下において、人々の間の絆、いわば人間関係や国内外の問題の理解を深め、あらゆる所で見られる分割、分裂を修復しようとしてレトリックに目を向けだした。そして、現代のレトリック理論家として、I. A. Richards, Kenneth Burke, Richard Weaver といった研究者が挙げられる。

I. A. Richards はマイクロ的なアプローチをとって、言葉の意味の問題

を検討した。そして現代のレトリックを誤解の防止策の研究と位置づけて、人々の間に起こる誤解について論じた。言葉がどのように意味をもってくるのかを視座の中心に置いた Richards は、隠喩 (metaphor)、脈絡 (context)、抽象 (abstraction) といった観点からレトリックの原理を考察した。Kenneth Burke はレトリックの枠組みを広く捉え、社会の中での人間の言語活動そのものをレトリック的行為として見なした。彼によれば、人間が社会生活を営む上で他人との協力が必要であるとし、その協力関係を作り上げることがレトリックであると指摘した。つまり、社会的統一を目指す行為そのものがレトリック的行為と称した。このことは、彼が述べるレトリックの中で、聞き手に対する訴求として「同一化」や「同質化」という概念を重要視したことからも明らかである。Richard Weaver は倫理的側面からレトリックを位置づけた。彼は「善」ということを視座の中心に置いて、あらゆる社会または物事や思想の真の度合いを測ろうとするものであった。これは、彼にとって不変の思想、本質や原理がこの世で重要であり、常に動き変わる社会は破滅するものであると説いている。このように彼の示すレトリックは、彼の人間観または社会観に深く関わっている。

コミュニケーション学科の誕生

上記のような学問の流れとともに、アメリカにおける大学の学科改組が指摘できる。1910年代にそれまで英文または英語学科の中でなされていたレトリック研究がスピーチ学科という独立した学科として形成された。そして1920年代には「コミュニケーション」という言葉が流行し、コミュニケーションの研究または教育に関心が集められた。その後40年代から50年代にかけて社会科学としてのコミュニケーションの研究が大々的に行なわれ、また人文科学からのアプローチであるレトリック研究も人気を博した。そしてスピーチ学科と看板をあげていたところもコミュニケーション学科と名乗るようになって、そこでコミュニケーションの研究のために社会科学と人文科学との合併となった。当初は必ずしも二つの流れは折り合いが

よくはなかったが、1970年代頃になってお互いに歩み寄りを示した。コミュニケーションの研究からも理論を確立する上で、また教育面からは統合された一貫した教育を施す上でも、お互いの歩み寄りが非常に重要であった。コミュニケーションの分野においては社会科学と人文科学が共生的な関係であり、それぞれのアプローチは特定の問題解決のためには補完的な関係を表している。

このような流れをくむアメリカにおけるコミュニケーション研究は、やはり日本と比べて、オーラル的側面を重視している。日本での研究はこれまであまりにもマス・コミュニケーションへの偏重が見られる。そのため日本におけるコミュニケーション研究がメディア研究として捉えられてしまっている。従って、個人内 (intrapersonal)、対人 (interpersonal)、非言語 (nonverbal)、説得を前提としたレトリック (rhetoric)、異文化 (intercultural) などのコミュニケーション研究が進歩していないのが現状である。アメリカの場合は、ほとんどの総合大学においてコミュニケーション学科があり、そこでは上記のコミュニケーション研究の他に、スピーチ・コミュニケーション教育の理論と実践も扱われる。また、発音や難聴矯正を主要目的とするスピーチ科学の研究・教育も行なわれている。さらに規模の大きな学科では、ジャーナリズムに関する理論と実践を取り扱っていたり、映画に関する理論・実践を行なっている。このような状況を見てみると、アメリカでのコミュニケーション研究が広範囲にわたっていることが伺える。

また研究面からでもレトリックという一分野においても、その研究対象が多岐になりつつあり、従来の言語の分析一辺倒ではなく、近頃広告、映画や音楽などに見られる非言語の要因も取り扱っている。しかし、その中ではやはり「説得」ということが前提条件として考えられている。このように、教育や研究の面から見ても、コミュニケーション学の多岐多様性がその特徴として現われてきている。

コミュニケーション学視点からの言語文化研究

これまで見てきたようにコミュニケーション研究の流れが変化し、さらに多種多様になってきている状況下で、言語と文化を学習することを主目的とする中では、コミュニケーションをどのように位置づけたらよいのかという問題が起こってくる。まず最初に考えられるのは、言語を使用するコミュニケーション行為に焦点を当てて、その行為がどのようにある一つの文化と相互作用を起こすのかを見ていく事である。そのことを考えていく際に、コミュニケーション学の視点から言語と文化をどのように見ていくのかを確認する必要が生じてくる。

言語文化と言うと、一体これは何を意味するのか混乱してしまうことがある。これまでは言語と文化とを切り離して考え、また研究を推し進めてきたわけであるが、言語文化と一口で言ってしまうと、従来の考え方は異なっており、言語と文化の不即不離の関係を前提として出発している。確かに、言葉と文化は切っても切り離せないものと考えられるが、片や反面、従来通りにそれぞれを区分して検討する領域も存在するし、また必要でもある。では、言語文化という領域では、コミュニケーション学の観点からすると何が求められているのかを考えてみたい。

まず、文化とは何かという質問があるが、これには様々な分野からのアプローチがあるため一口に定義づけることは困難である。アメリカのコミュニケーション学者のジョン・コンドンは、文化とは個人の人生、生活に対する見方、期待のあり方、行動の仕方、その人にとって「当然」「常識」とか考えられるものを指すものだとしている。つまり、私達が普段何気なく行動し発言することに文化の影響が入り込んでいると考えるのである。またその中には聞かれると説明に苦しむ儀礼または儀式なども含まれている。言い換えれば、自分が認識してきた世界を通して行動を見たり、理解することであり、それらをいかに学んできたかということである。そのような視点から考えると、たとえ同じ事象もしくは現実を見たとしても、文化的背景が異なればそれぞれ異なった見方をするものである。(正確に言

えば、そのことは個人個人によっても異なるということも言えるが、ここでは大きく見て、文化という枠組みを前提とするので個人個人の差異までも考えないことにする。)これは、私達が育った文化的環境の中で、私達を取り巻く無数の刺激から、ある意味を取り出す過程を身に付けている結果でもある。そして、その取り出す意味というのは私達が育った文化にとって意義あるものであり、そのように意味を取るように私達が学習してきたことである。私達は、無数の知覚できる刺激からほんの一部を取り出して、それを私達に意味をなすように再配列するのである。この過程は抽象化の過程であり、私達の積極的な行動を示し、そこには文化的要因が入り込んでいることは否定できない。つまり、文化が私達の物事に対する見方にかかなりの影響力を持っているのである。これからでも、文化と人間の行動との相互関係を研究することに価値が生まれてくる。

次には、言葉の問題について考える必要がある。これに関しては、まず言語の見方の一つとして、チャールズ・モリスが提唱した記号論を見ていく。彼は言語を含む記号体系を大きく次のように(1)統語論(記号とその他の記号との関係、単語とその他の単語との関係一文法など)、(2)意味論(記号とそれに関連する概念との関係)、(3)語用論(記号と人間行動との関係)―三つに区分した。この見方からすれば、コミュニケーション視点からの言語のアプローチとして関心を寄せるのは、二番目と三番目の領域である。つまり、ここで記号というものを言語に限定すると、言葉がどのように使用されるのかを観察しないでは言葉の意味を捉えられないし、言葉が人間の行動にどのように影響をおよぼすのかということも述べることができない。ここで、先程述べた、文化と人間行動との接点が見えてくる。ともあれ、言語が人間の行動に何らかの影響を与えているというのは明らかであるし、とりもなおさず、それは文化と言語がお互いに影響し合っている以上、文化が人間の行動に何らかの影響を与えているといっても過言ではない。ここで、人間の行動について言語と文化の両側面から考察することに意義が出てくる。

言語と文化との関係についてもう少し述べると、私達が日常、何気なく口にしていてる言葉にも文化観または価値観が入り込んでいることがわかる。例えば、「議論」という言葉を例にとると、日本では自分と相手との対峙関係が含まれていて、相手を打ち負かすとか相手を言いくるめるといった表現でもって、勝ち負けを前提にしているものと見なされるが、アメリカでは必ずしもそうばかりではなく、議論とはお互いがそれぞれの考えを出し合って、より良い考えを作り出そうとする場として見なされる。ここでは、議論に参加する者の関係は敵対という関係ではなく、むしろ協力関係を示唆しているのである。また、日米間でよく話題になるが、「イノベーション」という言葉の捉え方にも両国では差異がある。アメリカで「イノベーション」といえば、ある科学技術の原理を発明することだけを意味するが、日本では既存の原理でも、それを使いやすく改良するものまでも「イノベーション」の範疇に入れている節がある。この点において、日米両国間のひずみが生じ、ひいては経済摩擦などのような大きな問題に発展する。このように、文化が違えば言葉の意味も異なってくる、そして人間がとる行動もそれぞれ別個なものになってくる。

別の見方からすると、アメリカの人類学者のエドワード・T・ホルの提唱した「高い文脈 (high context) の文化」と「低い文脈 (low context) の文化」の区別が挙げられる。彼によれば、この区別は言葉の裏に存在するものにどれだけの重要性を文化が与えるのかという程度をしめすものであるとしている。「高い文脈の文化」には、表現された言葉が誰によって、どのような状況下で、誰に話されたかという社会的側面を考慮しなければその言葉の意味は理解されないとしている。逆に「低い文脈の文化」においては、表現された内容が大切であり、社会的状況という文脈はそれほど気にしなくていいものとされている。この事からでも、言葉と文化の密接な関係が伺えられる。

ここまで見てきたように、言語文化の枠組みの中でコミュニケーションを捉えるならば、人間の行動と言語と文化の相互関係を見ていくことが必

要であると考えられる。もちろん非言語的 (nonverbal) な側面も重要ではあるが、言語文化という以上、言語を通してコミュニケーションの行為がどのように文化と相互影響し合っているのかに焦点を当てるものとして見なしたほうが良いと思われる。

参考文献

Bormann, Ernest G. *Communication Theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 1980.

コンドン・J. (近藤千恵訳) 「異文化間コミュニケーション」東京：サイマル出版, 1980年。

Condon, John C. *Semantics and Communication*. 3rd ed. New York: Macmillan Publishing Co. 1985.

Golden, James L., Goodwin F. Berquist and William E. Coleman. *The Rhetoric of Western Thought*. 4th ed. Dubuque, Iowa: Kendall/Hunt Publishing Co. 1978.

川島彪秀・岡部朗一「スピーチ・クリティシズムの研究」東京：青学出版, 1978年。